

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中国宋朝（そうご）の時代に、身分の低い餅屋（もちや）の夫婦がいた。ある日夫は道端で餅を売っているときに誰かが落とした袋を拾った。袋の中を見てみると銀の軟挺（なでてい）（良質の銀貨）が六つ入っていたので、夫はこの袋を家に持ち帰った。

妻、心すなほに欲なき者にて、「我らはあきなうてすぐれば事もかけず。この主いかばかり嘆き

（探しているのだろうか）

（夫の海を）

求むらむ。いとほしき事なり。主を尋ねて返し給へ。」と言ひければ、「実に。」とて、

（広く世間に知らせたこと）

あまねくふれけるに、主といふ者出で来て、これを得てあまりに嬉しくて、

1 たてまつ

「三をば奉らん。」と言ひて、

（分けようとした）

2 金（い）がかり

既に分かつべかりける時、思ひかへして、煩（わづら）ひを出ださんために、主曰く、「七こそありしに、六あるこ

そ不審（ふしん）なれ。一つをばかくされたるにや。」と言ふ。「さる事なし。もとより六なり。」と論ずる程に、は

ては国（こ）の守（かみ）のもとにして、これをことわらしむ。国（こ）の守、眼（まなこ）賢（さとし）しくして、この主は不実（ふじつ）のもの、この男

（判定させることになった）

（眼力が働いていて）

は正直（しんじき）のものと見ながら、なほ不審（ふしん）なりければ、かの妻を召（よ）して、別の所にして、事（こと）の子細（こまごま）を尋ぬるに、

夫が申し状（しやう）にすこしも違（たが）はず。3この妻は極めたる正直（しんじき）の者と見て、かの主、不実（ふじつ）の事たしかなりければ、

（口い分）

3

国（こ）の守（かみ）の判（はん）にいはいく、「この事たしかの証（しやう）拠（よ）なければ判（はん）じがたし。ただし、ともに正直（しんじき）の者と見えたり。

（判断が難しい）

夫妻また詞（ことば）違（ちが）はず、主の詞も正直（しんじき）にきこゆれば、七あらむ軟挺（なでてい）を尋ねてとるべし。これは六あれば、別

（探して）

の人のにこそ。」とて、六ながら夫婦にたびけり。宋朝の人、いみじき成敗とぞ、

（六つすべて）

（お尋ねになった）

（立派な）

（立派な）

あまねくほめののしりける。

（国中で声大にしてはめた）

〔「沙石集」から。〕

（注） 国の守＝国の長官。

子細＝詳しい事情。

判＝判決。

(ア) 線1「三をば奉らん。」とあるが、「主」がこのように言つた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 銀貨入りの袋を拾つて届けたことへのお礼が欲しいという拾い主の「夫」の要求に応じようと思つたから。

2 落とした銀貨入りの袋が自分の元に戻つてきたことが嬉しくて、拾い主の「夫」にお礼をしようと思つたから。

3 拾つた袋に入っていた銀貨を全て譲ると言われて、せめて半分を持ち主である「夫」に返そうと思つたから。

4 銀貨入りの袋を返してくれた拾い主の「夫」が貧しい暮らしをしていたこと知り、銀貨を恵もうと思つたから。

(イ) 線2「煩ひを出ださんために」とあるが、誰がどのような「煩ひ」を出したのかを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「主」が、袋の中にもとは七つの銀貨が入っていたはずで、「夫」が一つ隠したのだと主張した。

2 「夫」が、袋の中の銀貨の枚数を七つだと間違えた「主」は本当の持ち主ではないと指摘した。

3 「主」が、袋の中に銀貨が入っていると知っていたら「夫」は返さなかつたに違いないと批判した。

4 「夫」が、袋の中に七つも銀貨を入れるのは不用心だから一つを隠すべきだと「主」を説得した。

(ウ) 線3「この妻は極めたる正直の者」とあるが、「国の守」がそう考えた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 拾つた銀貨入りの袋を持ち主に返すため、毎日落とした人を探していたから。

2 「国の守」に呼び出されたときに、銀貨を一つ盗んだことを打ち明けたから。

3 銀貨入りの袋を拾ったときの事情について、「夫」と全く同じことを話したから。

4 袋の持ち主がお礼に銀貨を与えようとしたときに、きっぱりと断つたから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 国の守は、袋の中にあつた七つの銀貨のうち、一つを夫婦にはうびとして与え、元どおり六つになつた銀貨を「主」に返した。

2 国の守は、袋を落とした「主」に落ち度があるとして、袋を拾つた夫婦を新たな持ち主と認め銀貨を六つとも与えた。

3 国の守は、正直に名乗り出た「主」にも銀貨を得る権利があるとして、夫婦には七つの銀貨のうち六つだけ与えた。

4 国の守は、「主」が主張した七つの銀貨が入つた袋は「夫」が拾つたものとは別物であるとして、夫婦に六つとも与えた。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人里離れた林の中を歩いていた「若い侍」は、古いお宮で夜を明かそうとしていた。

やや宵も闇(注)にして、四更(注)の空とおぼしきころ、十九(注)二十ばかりの女房(注)、孩子(注)をいだきて忽然(注)ときたる。

「かかる人家もとをき所へ、女性(注)として、夜更(注)けて来(注)べきにあらず。いかさまにも(注)化生(注)のものにこそ」と、

うしろめたく用心(注)して侍りしに、女うちゑみて、いだきたる子に、「あれなるはちちにてましますぞ。行(注)

ていだかれよ」とて、つきだす。この子するするとくるに、かたなに手かけて、はたとにらめば、(注)2

ままかへりて母にとりつく。「大事(注)ないぞ、ゆけ」とてつきだす。かさねてにらめばまたかへる。かくす

る事四五度にして、退屈(注)やしけん、「いでさらば、みづからまいらん」とて、件(注)の女房、ゑしやくもなく

来るを、臆(注)せずもぬきうち、ちやうどきれば、「あ」といひて、かべをつたひ天井へあがる。

明行(注)しのめしらみわたれば、壁にあらはなぬきをふみ、桁(注)などつたひ、天井を見るに、爪(注)さき長

事、二尺(注)ばかりの上らう蛛(注)、かしらよりせなかまで、きりつけられてししたり。人のしがいい有(注)て天井も

せばし。ああ、たかかたみぞや。またつれし子とみえしは、五りん(注)のふりしなり。をよそ思ふに、ばけ

物とおもひ氣をせきつつも、五りんをきらば、ばくやがつるぎもあるはをれ、あるは刃もこぼれなん。

そのときにして人を取りしにや。よきたくみなりかし。此人(注)も心せきて、身もはやらば、心のほかに越(注)3

度もあるべし。思案して五りんをきらざるは、ああ、くはほう人かな。

（「御伽物語」から。）

（注）四更＝一夜を五等分した第四の時刻。午前二時頃。

ちやうど＝物と物が激しく当たる音。

しのめ＝夜明け方、東の空が少し明るくなる頃。

ぬき＝貫。柱と柱の間に渡す横木。

桁＝家の梁を支える横木。

二尺＝約六十センチメートル。

上らう蛛＝女郎蜘蛛のこと。

五りん＝五輪塔の略。墓の上に建てる塔のこと。

ばくやがつるぎ＝莫邪の剣。中国の名剣の一つ。

(ア) ―線1「用心して侍りしに」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 おびえている女を怖がらせないようにしようと思ったから。
- 2 化け物が現れたら女を守ってやらなければならないと思ったから。
- 3 お宮から出ていけと女に言われるのではないかと思ったから。
- 4 夜遅く人気のない場所に女がやって来るのはおかしいと思ったから。

(イ) ―線2「そのままかへりて母にとりつく。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 刀を抜こうとしている「若い侍」が母親をにらんでいたので、恐ろしいことが起きるのではないかと思い、母親の前に立って母親を守ろうとした。
- 2 刀を手をしている「若い侍」があまりにも若かったので、「あの人はお前の父だ」という母親の言葉に疑いを抱き、振り返って母親を問い詰めた。

3 「若い侍」が、自分をにらみつけ今にも刀を抜こうとしているので、そばに近寄ることができず、母親のもとに戻って母親にすがりついた。

4 鋭い目つきで刀に手をかけている「若い侍」が化け物のように見えたので、足がすくんでしまい、母親にしがみついて離れなかった。

(ウ) ―線3「よきたくみ」とあるが、どんなことがうまい企てだったのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 お宮を訪れた人を油断させて殺すために、先に捕まえていた人間の母子を自分に従うように手なずけていたこと。

2 お宮を訪れた人が五輪塔に刀で切りつけるように仕向け、刀が使い物にならなくなったところで襲いかかること。

3 お宮を訪れた信心深い人に五輪塔を見せることによって警戒心をなくさせ、すきをつけて殺してしまうこと。

4 お宮を訪れた信心深い人が刀を置いて母子とともに祈りをささげる瞬間を狙って、お宮の天井から襲いかかること。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 古いお宮で蜘蛛の化け物に襲われた「若い侍」は、五輪塔に向かって熱心に祈ったところ、神の加護により命が救われた。

2 「若い侍」は、古いお宮で遭遇した女と子どもが蜘蛛の化け物にちがいないと考え、襲われる前にお宮から脱出した。

3 「若い侍」は、立ち寄った古いお宮で蜘蛛の化け物に襲われたが、慌てず冷静に対処することができたので、命が助かった。

4 古いお宮で蜘蛛の化け物を退治した「若い侍」は、多くの人間が殺されていたことを知り、五輪塔を建てて犠牲者を弔った。